

## 2018/10/03 先週のメッセージより

### 「私たちが恐れるべきは何か」

私たちは災いを恐れて、災害や事故から身を守る方法を模索します。また、人の目を恐れて、周りから悪く思われないようにふるまおうとします。しかし、聖書を読むと、そのようなものを心配したり、恐れたりする必要はないと、神は言っておられます。私たちは外的な要因が自分を苦しめると思っているのですが、実は、そうではないのです。

「だから、彼らを恐れてはいけません。おおわれているもので、現わされないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはありません。」(マタイ 10:26)

「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」

(マタイ 10:28)

私たちが恐れるべきものは、人でも災害でもなく、神です。なぜなら、私たちの苦しみは、神との関わり方によるものだからです。

私たちはキリストという土台の上に建てられた建物であると聖書は教えます。つまり、私たちが揺れ動いてしまうのは、土台が緩んでいるということなのです。ちゃんとキリストの土台に建っているかどうか、外側ではなく自分自身の内側の土台に目を向けなければなりません。しっかりした土台に建っていれば、何があっても平安でいられますが、自分の外ばかり見ていると、外からの攻撃につらさを覚えます。土台が緩んでいることに気づかず、外に原因があると思って苦しみを取り除こうとしても、それはうまくいきません。

### ■なぜ神を恐れる必要があるのか

#### 1. 私たちは死人であるから

人間は神によって造られましたが、アダムが罪を犯したことによって死が入り込み、神との結びつきを失いました。私たちは皆、神との結びつきがない状態で生まれ、やがて死にます。いつか必ず死ぬ存在であることを、聖書は死人と呼んでいます。

人は神とつながっている時は、永遠に生きることができました。神が永遠だからです。私たちはちょうど幹から折れた枝のような存在で、折れてすぐに枯れることはなく、しばらくは花を咲かせたり、実を結ぼうとしたりしますが、しばらくすると少しずつ枯れてきて、最後は土に帰るのです。人が生まれるということは、枝が折れた状態になったということなのです。

これを生きようにするには接木するしかなく、それができるのは、イエス・キリストしかいません。ですから、私たちが恐れるべきは、人ではなく神なのです。私たちがいのちにつなぐことができるのは、イエス・キリストだけなのです。

「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」(I コリント 15:22)

イエス・キリストを信じるということは、神に接木されたということです。いったん接木されたら、その人は永遠に生きるのです。神は、接木された枝を誰にも折らせることはなさいません。

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

(ローマ 8:38-39)

## 2. 神が唯一の医者であり、私たちは病人だから

神は、私たちを接木したらそれで完了、後は放っておくというわけではありません。接木した枝を成長させ、多くの実を結ばせたいと願っておられます。その実とは、平安です。人は皆、不安という病にかかっているのです。神はそれを治療し、癒して、平安を与えたいと願っておられるのです。

人が不安な理由は、本来永遠に生きる存在であるにもかかわらず死の体を持っていることによるものです。永遠であることを知っていながら、現実には滅びると言う「不協和音」が不安を引き起こしているのです。聖書はこのことを、肉の思いと御霊の思いと言っています。しかし、不安という病気にかかっていることを自覚する人はまれです。人は、外的な困難にぶつかるとう不安を感じるため、不安の原因は自分の外側にあると考えがちです。しかし、そもそもの不安は不協和音から来ているため、この問題を解決できるのは、イエス・キリストしかいません。

イエス・キリストは私たちに永遠のいのちを与え、何があってもあなたを愛しつづけてくださるという確信を与えてくださいます。魂は永遠を知りながら、体は滅びると言う不協和音は、自分は価値がない、愛されないという不安を私たちに与えています。この不安によって、私たちは悪を行ない、さらに自分のつらさを増し加えています。

もし、あなたが難病を患い、その病気を完全に治せる医者が一人しかいないとしたら、何があっても彼に目を向け続けることでしょうか。不安という病を治すことができる医者は、イエス・キリストしかいません。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」(I ペテロ 2:24)

「罪」とは「不安」のことです。私たちは初めから不安を抱えて生きているのですが、不安

を見ないように、楽しいことや面白いことに目を留めて生きています。それで順調な時には不安を感じずに済みますが、ひとたびうまくいかないことが起こると、もともとあった不安が頭をもたげるわけです。

この不安を癒すことができるのは神だけですから、私たちは神を恐れるのです。

### 3. 神との関係しか残らないから

「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」(I ペテロ 1:24-25)

どんな花も草も、やがて枯れて何も残りません。私たちがこの世で手にしたものは、死と共に滅びます。神のことば、神との関わりだけがいつまでも残るのです。最後まで残るもの、神との関わりを大切にし、そのために時間を使い、人生を無駄にすることのないようにしましょう。

#### ■神を恐れるとは

「恐れる」という言葉には、「畏敬の念を抱く」という意味と「恐怖を感じる」という意味があります。ギリシャ語の原文でも、恐れにはこの両方の意味があると考えられます。

「畏敬の念を抱く」場合、そこには肯定的な関わりがあり、「恐怖を感じる」場合は、そこには否定的な関わりがあります。後者の関わりは最も強烈な関わりであり、憎しみや蔑みの感情を生じさせ、人を罪へと導きます。ですから聖書は、その「恐怖を感じる」関わりを避けさせるべく、「恐れるな」と教えています。

つまり、神を恐れるとは、神に対して「畏敬の念を抱く」ということであり、「恐怖」を感じなさい、ということではありません。

#### ■キリストから目を離さない

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」(へブル 12:2)

祈りを通して、礼拝を通して、メッセージを通して、御言葉を通して、キリストから目を離さないことが、神を恐れる具体的な関わりです。これらのことを大切にして、生きる土台をしっかりと築くことが、「罪と戦う」ことになります。

「あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。」(へブル 12:4)

「罪と戦う」というと、多くの人は悪い行いをしないように戦わなければならないと考えます。しかし、聖書が教える罪とは、神を信頼しないことです。神を信頼できずに不安が解決しないため、人は悪い行いへと向かっていくのです。聖書では、行いの罪はギリシャ語では

複数形が使われ、神との関わりにおける罪には単数形が使われています。

罪と戦うとは、キリストから目を離さないことです。あなたは、本気になって、キリストから目を離さないようにしているのでしょうか。

神としっかり結びつくと平安になるので、悪いこともしなくなります。結びついていないと不安が生じて、悪いことをしてしまうのです。悪い行いは当然避けるべきものですが、本気で戦わなくてはいけない戦いは、キリストから目を離さないことです。

### ■ 困難に出会ったら神のことばを信じる

神を恐れるとは、神のことばを信じることです。困難に出会っても失望するのではなく、神様なら何とかしてくれると、神の言葉を信じることです。

「するとそこに、ヤイロという人が来た。この人は会堂管理者であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して自分の家に来ていただきたいと願った。彼には十二歳ぐらいのひとり娘がいて、死にかけていたのである。」(ルカ 8:41-42)

ある時、ヤイロという会堂管理者が、自分の娘をいやしてくださるように、イエス様に願いました。ヤイロは、イエス様なら死にかけて娘をなんとかしてくださると信じたのです。しかし、イエス様が彼の家に向かおうとしたところ、大勢の群衆が集まってきて、なかなか進めません。しかも、一人の女性がいやしを求めてイエス様に触れた瞬間、12年間患ってきた病が癒されるという奇跡が起こりました。そして、イエス様がその女性と会話をしている間に、ヤイロの娘が死んだという知らせが入りました。

「イエスがまだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人が来て言った。「あなたのお嬢さんはなくなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」これを聞いて、イエスは答えられた。「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」  
(ルカ 8:49-50)

せっかくイエス様を信じて来たのに、娘は死んでしまいました。しかし、それでもなお、イエス様は「恐れなくてただ信じなさい」と言われました。そして、この後、娘は本当に生きかえります。そんな困難の時でも、「恐れなくてただ信じる」、これこそ畏敬の念を抱く「恐れ」です。

### ■ 神が自分につけた価値を値引きしない

神はあなたを「高価で尊い」と言い、ご自分のいのちを支払う価値があると言われます。ところが私たちは「自分はなんて価値のない人間なんだ」と言って、神がつけた価値を、自分で値引きしてしまいます。

あなたが神を恐れるなら、神がつけた値段に文句を言ってはなりません。素人は、プロがつけた値段に文句を言ってはいけないのです。

自分はダメだと言って値引きするのは、神への反抗です。そこに神への恐れはありません。あなたは素晴らしいと言っておられる神がつけた値段を受け取って感謝することが、神を恐れるということなのです。

世の中は、あなたの価値を安く値をつけます。世の中の価値観に騙されて、それを信じることが問題です。

「あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。」(ヨハネ 8:15)

肉とはこの世に属するものであり、表面だけのことです。それによって価値が下がるようなことはありません。あなたは、高価で尊いのです。さばくとは、価値を値引きする行為です。そのようなことをしてはいけません。

神は私たちの土台であり、私たちといつも共におられます。それは、私たちが素晴らしいからです。神は、私たちを神と同等の価値があるとみておられます。私たちは神の一部です。それを、価値がないと勝手に決めつけるのは、神を恐れない行為です。自分のことも、他人のことも値引きしてはなりません。

神を恐れるとは、神を信頼することです。自分は神に愛されているということを否定しないで、しっかりと受け取りましょう。そうすれば、平安が訪れます。